

# なぜ我々は表現するのか。 ——今、その原点に立ち返る

対談

「歌舞伎俳優」Nakamura Kazutaro

## 中村 壱太郎

## 栗本 智代

「大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所研究員」  
Kurimoto Tomoyo



脇坂敦史 | 構成  
宮村政徳 | 撮影

コロナ禍で「不要不急」と判断され、休演・中止が相次いだ舞台芸術。それは日本を代表する伝統芸能・歌舞伎の世界をも揺るがせている。

400年の歴史でも初となる長期休演を経て、変わろうとしているものは何か？そこで表現にたずさわる人々は、この事態とどう対峙しようとしているのか？

そんななか「ART歌舞伎」の配信など新たな挑戦が話題の中村壱太郎さんに、危機に立つ文化芸術が目指すべきスタイル、伝統と革新の新しいかたち、

舞台ならではの魅力、さらには上方歌舞伎の未来について、自らも「語りベシアター」で表現活動にたずさわる、

大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所の栗本智代研究員が幅広く伺った。

### 関西の文化の灯を 絶やしてはならない

**栗本** 本日は上方歌舞伎の魅力について伺いしながら、現代を生きる私たちにとって歌舞伎をはじめとする文化芸術がもつ意味や役割についても、お考えをお聞かせいただけたらと思っています。

**壱太郎** 1歳の時に京都・南座で初お目見得をし、5歳で今はなき大阪・中座で初舞台を踏むなど、僕自身は物心ついた頃から上方歌舞伎の人間という意識が強くありました。とりわけ祖父が上方歌舞伎の大名跡・坂田藤十郎の四代目を襲名した時は高校生でしたが、70歳を過ぎて新たな挑戦ができる伝統芸能の奥深さを感じ、一生を

かけてやっていける仕事であると覚悟を決め、東京とは違う関西における歌舞伎というものを大切にしていきました。祖父も上方歌舞伎と江戸歌舞伎、ふたつの車輪がまわって発展していかなければ本当の意味で歌舞伎の継承にはならない、といつも申しておりますから。

**栗本** 関西に住む多くの人間にとって壱太郎さんは上方文化の神髄を体現されている、誇りともいえる存在です。けれども2020年3月から、私たちファンもチケットを買っても払い戻しという状況が続きました。コロナ禍は歌舞伎をはじめとする舞台芸術や芸能のすべてに甚大な影響をもたらしましたが、一方で文化芸術というものの価値を考えなおす機会にもなったと思います。非常時においては、優先度が低いと考える人がいる一方、「こんな時だからこそ歌舞伎を観たい」という渴望を感じ、改めてその大切さを再認識したという人も少なくありません。**壱太郎** コロナ禍により歌舞伎の公演ができないというだけでなく、このまま関西における文化の灯を

絶やすことはできない。そんな危機感がいつもありましたし、今も続いています。一方で、どんな演劇界の人にお話ししても驚かれるのですが、歌舞伎役者は1カ月に公演25日というスケジュールも当たり前。翌月の舞台のお稽古数日も含めると、ほとんど休みがありません。それだけに、3月に公演がキャンセルとなり、思いがけずいただいた長い「お休み」は、個人的にも大きなターニングポイントとなりました。ちょうどそんな時期、ある方に言われた「積極的な冬眠をしろ」という言葉が胸に強く響いたんです。ただ、僕はじっとしてられない性格なので……。

### 役者という一個人の 立場でもできること

**栗本** 壱太郎さんは、いわゆる自粛期間中も積極的な行動で周囲を驚かせていましたね。

**壱太郎** さまざまな方が書かれたメディアの記事を読みながら、これは大変な時代なのではないか？もう歌舞伎はなくなるんじゃないか？というような強い危機感をも

2020年7月に配信された『ART歌舞伎』のうち『花のこゝろ』の舞台写真。春虹の名で自ら手掛けた脚本、最先端の衣裳とメイク、優美な舞は世阿弥の夢幻能をさえ想わせる。  
©KSR Corp.



ちました。役者という一人の立場でしかありませんが、今だからこぞできることは何だろうか、と4月中旬頃から考えはじめ、5月のゴールデンウィーク明けには企画書を書いて、実現を模索しはじめたんです。生の舞台でお客様と接することはできなくても、何かを伝えていきたい。もちろん歌舞伎は娯楽ですから、非常時における優先順位はいつも二番手、三番手、あるいはそれ以下。でも、こんな状況であっても楽しめる、そんな娯楽を歌舞伎も提供すべきではないかと思ったんです。幸いにも僕は仲間やつながりに恵まれていたこともあり、いろいろな企画を始動させることができました。

**栗本** ネット配信による試みとして、歌舞伎界では松本幸四郎さんが立ち上げられた『凶夢歌舞伎』\*1とともに、壱太郎さんが独自のアプローチでお披露目された『ART歌舞伎』が、特に斬新だったように思います。幸四郎さんとも、そういったお話はされたのでしょうか？

**壱太郎** 自分のなかで新たな企画が形をとりはじめた頃、偶然にも「\*1」とともに、壱太郎さんが独自のアプローチでお披露目された『ART歌舞伎』が、特に斬新だったように思います。幸四郎さんとも、そういったお話はされたのでしょうか？

そして、笛、津軽三味線、太鼓、二十五絃箏のコーポレーションによる創作舞踊で、視覚的にも聴覚的にも最先端のアートを美しい映像のなかにまとめていらして、オリジナルリテイクあふれる世界を堪能しました。有料配信を行うプラットフォームをはじめ、作品の企画、春虹の名での脚本、総合演出まで壱太郎さんが準備されたと同っています。この作品にはどんな思いがこめられ、誰とどのようにつくりたいというお気持ちがあったのでしょうか？



幸四郎さんからご連絡をいただきました。そこで、自分はこんな配信ライブを考えている、というような考えを聞いていただき、「何かをやっているかなければならぬ」という気持ちと共有できました。それに勇気を得て、一緒にやってみようとお話をさせていただきました。

**栗本** そういった問題意識が歌舞伎界のなかにも広がって、YouTubeチャンネル「歌舞伎まじょう」\*2のような業界あげての試みが始まったわけですね。

**壱太郎** 配信によるそうした試み自体、コロナ以前の歌舞伎界では考えられなかったことかもしれません。でも、公演中止でバラバラになりかけていた役者をはじめ、歌舞伎関係者が再び団結とまではいなくても、それぞれが何を考

え、どう行動をしようとしているのか、意識し合うきっかけになったと思います。

**栗本** 壱太郎さんは、それよりも早く個人のYouTubeチャンネルを開設、積極的な映像配信を始めておられました。

**壱太郎** よく「早かった」と言われるのですが、その頃には音楽はもちろん落語や講談など他ジャンルでも配信ライブが盛んに行われていました。その意味でも、歌舞伎の公演が行えない時期に、お客さまは再び戻ってきてくれるだろうか？ そんな不安があったことは事実です。ただ僕自身はYouTubeではありませんから、特にYouTubeというメディアに合った表現を考えたことはありません。5月に開設した「かずたろう歌舞伎クリエイション」と

ぜ我々は表現するののか」という原点ですね。そこにはもちろん生の舞台上に立ってないという点もあったと思います。そんなふうには『ART歌舞伎』を始めた時の熱量は、僕がこれまで歌舞伎で培ってきたものとまったく異なるものであったのを覚えています。

**栗本** まずは、一緒にやりたい人と思うことから、始まったわけですね。

**壱太郎** その通りです。たとえばプロデューサーを引き受けていただいた湘南乃風\*3の若旦那(新羅慎二)さんは、以前からの知り合いでした。歌舞伎を観にきてくれた時の感想も、ジャンルはまったく違うのに「あそこの義太夫のフシが格好よかったです！」なんて熱く語ってくださいって、いつも感性の豊かな人だと思っています



た。また尾上右近君は僕の後輩ですが、後輩というよりも同志。同年代でも、踊れて、同じ熱量で舞台上に立っている仲間のひとりです。彼だったら一緒に「化学変化」を起こせるのではと思います、真っ先に声をかけました。

**栗本** 衣裳や化粧、音楽も、和のテイストを超える新しい演出で、ずっと浸っていたい世界でした。

**壱太郎** コロナ禍にあって、早い段階で普段の衣裳や髪が使えないことがわかっていました。そのことが、逆に新しいことを試すチャンスになったかもしれません。衣裳やメイクにも、たとえば蜷川実花さんの映画などで活躍されている最先端の方々とのつながりができ、積極的に関わってもらったことができました。そうした面も含め、1回目というのは勢いと気迫でつ

いう僕自身のチャンネルは、その時点で構想していた『ART歌舞伎』への布石というか、最初の第一歩という位置づけでした。いきなり有料のコンテンツを配信しても、誰も見向きもしてくれないだろうと考えたわけですね。

**栗本** さまざまな舞踊や、舞台作品の解説、髪や衣裳の紹介など、興味深かったです。ご苦心されたのはどんな点でしょうか？

**壱太郎** 歌舞伎役者の価値をどうするか？という部分で悩みました。歌舞伎役者にはある意味「神秘的」な部分も必要です。テレビやラジオ、雑誌などの取材で僕自身は「素のまま」を出しているつもりですが、いざ自分が番組をつくる立場になってみると、それをどこまで出すのかという、さじ加減が意外に難しい。

### 今、誰と何をやりたいんだろう？

**栗本** 7月12日、いよいよ『ART歌舞伎』が有料配信されました。壱太郎さんと尾上右近さん、そして日本舞踊家である花柳源九郎さんと藤間涼太郎さんの4人、

くってしまった感じはあります。ただ、コロナ禍で始めたからといって、その時だけのものとして終わってしまうのでは意味がない。コロナを機に始まったとしても、のちのちまで続くようなものをつくらなければ、という思いは最初からありました。2021年の第2弾公開に向けて、すでに構成などを考えておりますが、これからがいよいよ大切になってくると思っています。

### 「コロナ後」に歌舞伎は生き残れるのか

**栗本** 私は、関西の活性化を目指す取り組みの一環として、まちの歴史や文化、エピソードや将来の可能性などを、語りや音楽、映像を交えた独自の手法で、楽しくわかりやすく伝えていく「語りペシアター」という公演活動を展開しています。今年度、初めてオンライン配信用に新たな作品をつくりましたが、映像では、その場の空気の振動、高揚感が伝わっていないように感じられ、色合いも違ったりしてずいぶん戸惑いました。

**壱太郎** 『ART歌舞伎』をつくっ



2020年12月の京都・南座の吉例顔見世興行では『廓文章〜吉田屋』で遊女の夕霧を艶やかに演じた。  
©松竹株式会社

ている時も感じたのですが、映像といっても単に舞台をそのまま映すだけでは意味がないし、どの場面でのカメラの映像を使うのか、アップかロングか……そんな取捨

選択をすることが大切だと痛感しました。特に捨てる方が難しいですね。舞台の人間としては、役者もいいし、衣裳もいいし、舞台装置もいいし、音楽もいいし、すべてを見てほしいという気持ちがある。けれども、それは同じ場所を共有する舞台だからこそ言えることで、ピンポイントで捉える映像にはまた違った魅力があるということを、改めて発見した気がしています。

**栗本** その待望の舞台は、ようやく8月の東京・歌舞伎座で始まりました。12月には京都・南座の顔見世興行に出演されていますが、今、どのような思いで舞台に立っておられますか？

**吉太郎** 舞台にのぞむ意気込みという意味では、以前と少しも変わりません。一日一日、舞台を観に来てくださる方がいてこそですし、その時、その場にいなければ味わえないものをお客さまに伝えるべく、すべてを賭けています。最初は公演を再開できてよかった、という「お祝いモード」のような雰囲気もあったかもしれませんが、今はもうコロナ禍だから特別という時期ではないのかな、と。感染対策を万全に行い、観客数も減ら

新しさを付加することで、過去から現在が見え、未来への礎を創ることができると思います。

### 結局、すべてが生 の舞台に戻ってくる

**栗本** 「語りベシアター」でも、たとえば昨年はシンガポールでの文楽の公演に合わせ、現地在住の方へ、上方芸能が発展した背景・舞台としての大坂や作品の紹介をしました。商人や遊女の立場や価値観、なぜ心中したのかなど、結果として、日本の文化をほとんど知らない方にも当時の大坂の文化、人形浄瑠璃や歌舞伎の面白さが伝わったという手ごたえがあります。

**吉太郎** 舞台だけでは伝わらない、背景や文化についてのフォロワーアップは大切ですね。上方と江戸の文化が違うとするなら、地域に根づいた他ジャンルの文化を意識したり、つながったりする部分ではないかと思えます。祖父(四代目坂田藤十郎)が若い頃に「上方風流」という仲間たちの集いがあったそうです。落語家の桂米朝さん、俳優の藤山寛美さん、能楽師の茂山千之丞さんをはじめ、異

しながらの公演という難しい状況が続いてはいますが、そうしたなかでコロナだけの一時的な問題ではなく、もともとあった課題が見えてきたということかもしれないと思えます。

**栗本** 潜在的にあった課題が、鮮明になったということでしょうか。

**吉太郎** そうなんです。もちろん、この状況下で公演は縮小せざるを得ない。けれども、「コロナ後」になり、その時に歌舞伎は生き残れるのか。それを考えながら、今は舞台に立っています。歌舞伎が400年前から歩んできた歴史を振り返ってみれば、もっと大きい世の中がひっくり返るような変化を生き抜いてきたわけです。変化に対応していく体力、そして思考というのには常にもっていかないといけないと思えます。

### 身近な土着愛とつながる、 上方歌舞伎の魅力

**栗本** そうした点も踏まえて、現代における、歌舞伎の存在意義についてどう考えておられますか？

**吉太郎** 大衆の娯楽として生まれた歌舞伎は、時代とともに少しずつ

分野の錚々たる方々がお互いを遠慮なく批評していたりして(笑)、

すごく刺激的なんです。僕たちはその孫世代にあたるのですが、数年前に「新編 上方風流」という対談の企画が狂言師の茂山童司(現・三世茂山千之丞)さんをナビゲーターに行われました。そういう上方ならではのつながりも、これからもっと大切にしていきたいと思っています。

**栗本** さまざまな垣根を取り払うことで、新しいものを生み出す力になる。ただ、ベースにはやはり伝統の継承があると思えます。

**吉太郎** ちょうど、祖父が亡くなったばかりということもあるのですが、教えというものを改めて噛みしめる時でもあると感じています。祖父の教えが自分のなかに落とし込まれたら、それをどう自分は体現できるのか。たとえば今回、『廓文章』の夕霧太夫を演じるのも「めぐり合わせ」のようなもの。その時、その時の舞台、あるいは生活のなかで感じるものを大切にしながら、真摯に演じていく以外にはないのかなと思います。結局、戻ってくるところは生の舞

つ「高尚なもの」になってしまいました。それで生き残ってきたのも事実です。「伝統芸能」ではあるけれども、今、娯楽として商業ベースで公演されています。そのバランスを取りながら、娯楽であり続けることが生き残る意味であり、道筋でもあると思えます。

**栗本** 大坂では元禄期頃から、人形浄瑠璃や歌舞伎が盛んになっており、市井の人々による現実にあった心中などの事件がいち早く舞台上で上演されました。それが和事「4」と呼ばれる、情感こまやかな芸にもつながっていると思えます。

**吉太郎** 江戸時代には、その時期の最もホットな事件を題材にしていきましたよね。今の歌舞伎が、まったく同じように先端的かつ身近な娯楽であり続けることは難しいのかもしれない。けれども、たとえば歌舞伎の語源のひとつである「傾く」ということ。目立つ、奇抜であるという価値観は現代も変わらずに存在しています。そういう価値観と根底でつながる、という可能性はたしかにあるのではないのでしょうか。

台。すべてが、そこにつながっていると感じています。

**栗本** ますますのご活躍を期待し、舞台を拝見するのを楽しみにしております。

〔取材日：2020年12月8日〕

#### 注

- \*1 十代目松本幸四郎を中心に、ビデオ会議システムZoomに着想を得て行われた歌舞伎史上初のオンライン有料配信公演。2020年6月から『忠臣蔵』各段を上演。中村吉太郎は顔世御前と、おかる役で出演。
- \*2 日本俳優協会と伝統歌舞伎保存会が開設したYouTubeチャンネル。有名俳優を中心に、さまざまな情報を発信している。
- \*3 日本の男性4人組レゲエグループ。
- \*4 元禄時代の上方で初代坂田藤十郎が完成したとされる、柔らかな恋愛表現に優れる演技。情感豊かな恋愛表現に優れる。
- \*5 上方歌舞伎の代表作。落魄した若旦那の伊左衛門と遊女の夕霧の恋模様。ふたりが織りなす口舌(くぜつ)喧嘩(けんか)が見もの。
- \*6 二代目中村藤治郎(中村吉太郎の曾祖父)と二代目中村扇雀(四代目坂田藤十郎、吉太郎の祖父)の舞台がモデル。

#### 中村吉太郎 (なかむら かつたろう)

1990年、東京都生まれ。91年、南座での『廓文章』の藤屋手代で初目見得。95年、中座での『姫山姥』の子公時で初舞台。上方歌舞伎を中心に活躍する女方のホープ。2018年には坂東玉三郎演出『滝の白糸』のヒロイン、同じく玉三郎監督で『お染の七役』を男女七役を早替わりで演じたほか、『女殺油地獄』のお吉、『神楽天口渡』のお舟など多彩な役どころで注目を集めている。

#### 栗本智代 (くりもと とも)

大阪ガス(佛エネルギー)文化研究所研究員。1988年大阪ガス入社後、91年より現職。94年より、関西の活性化を目指す取り組みの一環として、わがまちの歴史・文化やエピソードを語り映像と音楽による独自の手法でわかりやすく伝える「語りベシアター」公演活動を展開。